

演題番号：C10

右腎腫瘍と後大静脈の部分切除術を実施した犬の1例

○森下正隆, 田戸雅樹, 宇根 智, 川田 睦

ネオベッツ VR センター 大阪市

1. はじめに：腫瘍摘出に際して温存臓器の血流変更が予測される症例はまれに存在する。今回術前のCT検査で右腎腫瘍によって後大静脈血流の減少が疑われ、腫瘍尾側後大静脈および左腎静脈の側副路が認められた症例において、後大静脈と右腎腫瘍摘出を計画、実施した症例の概要を報告する。

2. 材料および方法：症例は、9歳8ヵ月齢の避妊済みのミニチュア・ダックスフンドであった。元気食欲消失にてホームドクターを受診、右上腹部腫瘍を指摘され、当センターに紹介来院した。CBC、血液生化学検査にて著変は認めず、エコー検査において内部に液体貯留を認める腫瘍を認めた。CT検査では正常な右腎構造の消失と腫瘍化、後大静脈を完全に含むことが明らかとなった。左腎構造に異常は認めないものの、左腎の静脈環流は狭小化した左腎静脈からa右腎腫瘍を介して後大静脈に流入(血管径：0.9 mm)、b結腸近傍を走行し、左内腸骨静脈に流入(血管径：1.8 mm)、c腸管膜静脈に流入(血管径：1.0 mm)が認められた。また、後軀からの静脈還流は、d右腎腫瘍を介して後大静脈に還流するもの(腫瘍尾側血管径：1.5 mm)の他にe第5腰椎レベル頭側で後大静脈より背側に走行、椎体腹側を頭側に走行する静脈を介して奇静

脈に流入(血管長径×短径：3.5 × 2.5 mm)が認められた。血管断面積比で左腎から腫瘍経由：側副路経由では1：5.2、後軀から腫瘍経由：側副路経由では1：3.9であった。治療として、側副路の発達から腫瘍部位の後大静脈を含んだ右腎腫瘍摘出を計画し、実施した。摘出した右腎腫瘍は、病理組織学的検査で広範囲に出血を伴う血管肉腫と診断された。

3. 結果：術後の血管径は、b'：2.1 mm、c'：1.0 mm、e'：3.8 × 2.8 mmであった。術後腎数値は異常を認めず、摘出前に呈した食欲低下は改善した。その後、術後化学療法などは行わず経過観察していたが、術後279日で自宅にて死亡した。

4. 考察および結語：術前と術後の断面積の比較では、 $b + c$ ： $b' + c'$ は1：1.27、 e ： e' は1：1.21、 $a + b + c$ ： $b' + c'$ は1：0.97、 $d + e$ ： e' は1：1.07であったことは、腫瘍摘出により側副血管の断面積が増大し、その増加分は結紮血管に相当するものであった。温存臓器の血行変更に関して、側副血管の把握や血管径の検討は有益な可能性が示唆された。